

④金沢木材港のマリーナ計画

風間亮

一 はじめに

港と横浜は切っても切れない関係にある。今から一二九年前の安政六年、横浜港は幕府の命により開港をみたわけであるが、当時、港と街は一体であり、ともに刺激し合いながら発展したことは想像に難くない。港まわりの賑わいや活力がその頃の錦絵からうかがい知れる。

その後、港は国の発展を支える基幹産業を臨海部に立地させ、工業港的な性格も併せ持つようになる。鶴見・神奈川の臨海部の埋立、根岸湾の埋立は、各々の時代の社会、経済的要請によるものであり、これが今日、わが国の繁栄の一助となったと言える。

しかしながら、自然海岸線埋立は、海から、港から市民を遠ざけ、横浜市民の意識のうえからも港や海は身近なものとして感じられなくなつたのではないのだろうか。

一方、近年、港湾を取巻く環境は大きく変化

しつつあり、横浜のように都市と港が重合している大都市港湾にあつては、港は単に「物流」や「生産」の場としてではなく、「生活」、「文化」に係る機能を積極的に整備することに

より、これらの諸機能が調和よく組合わさつて相互に連携し合い、全体として、高度な機能を発揮できる総合的な港湾空間を創造することが求められてきている。

このような状況の中で公共、民間を問わず、海洋空間の有効利用の諸構想の検討が進められるなど、海に対する新たな取組みがなされている。

これは、海が本来持っているさまざまなポテンシャルを積極的に活用することにより、物流、産業活動だけではなく、「うるおいとゆとり」のある空間としての海を舞台に、豊かな社会を創造していこうとする動きの現われであると見ることができよう。

一 はじめに

二 計画の背景

三 計画の概要

四 管理・運営方策等の課題

五 おわりに

二 計画の背景

① 海洋性レクリエーション需要への対応

いま、海のレクリエーションが注目されている。四面を海に囲まれ、長い海岸線を有するわが国において、海は物流・産業・生活・文化の場あるいは対象として、人々と深い関わりを持つてきた。

わが国の経済が、高度経済成長期から二度の石油危機を経て安定成長期へ移行する過程で、国民生活は、生活水準の向上、労働時間の短縮等大きな変化を遂げ、これに伴って国民の価値観も大きく変化してきており、量的な充実から質的な充実が重視されるようになってきている。いわば、心の豊かさや、ゆとりのある個性的・創造的な生活に強い関心が寄せられてきており、これらを支えるレクリエーション活動は、量的・質的に一層の増大、多様化が見込まれるようになってきた。

このような中で、いろいろな楽しみ方のできる海洋性レクリエーションが活発化してきている。海上や海中でのボートイング、ダイビング、フィッシング等のスポーツ性のものから、海の眺め、波の音、潮の香を求める等の休養・散策まで、年齢を問わず楽しめる海洋性レクリエーションに関心が高くなるのは当然のことと言える。

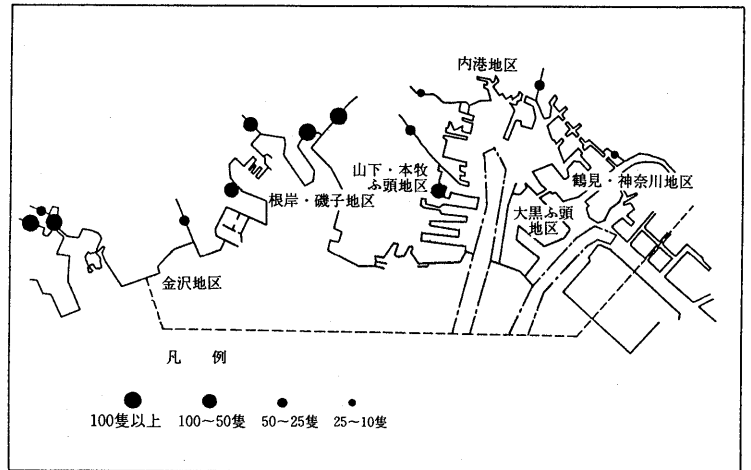
横浜港においても、今後、著しい伸長が見込まれている海洋性レクリエーション需要に積極的に対応することが期待されている。

② 放置艇対策

横浜港の港湾整備の基本方針の一つとして、市民と海・港との結びつきを強化する施策を掲げており、海洋性レクリエーションのための整備整備を公共の手で積極的に推進することになっている。特にプレジャーボートの係留基地となるヨットハーバー、マリナー等は民間の手で整備されてきているが、その収容能力は需要の三割弱を満たすに過ぎず、大部分が横浜港内の運河や河口部に無断で係留されているのが実態である。(図-1参照)

これらの大部分は十分な管理がなされておらず、出水時に艇が流されたり、護岸やガードレールなどから係留索(もやい)を取り、公共物

図-1 港内けい留プレジャーボート位置図



を破損させたり、また、活動時には、本船航路を横切るなど船舶の安全航行に支障を及ぼすなどの問題が出てきている。

これらを解決するためには、港湾や河川の利用に関するルール作りや、プレジャーボートの特別な航行規則やセーリングなどの活動水域の確保などの検討が必要となる一方、放置艇の受皿としてのマリナー整備が必要となっている。

三 計画の概要

金沢地区の木材港は昭和四十年代、それまで新山下地区にあつた原木取扱いの港湾施設を移転させたものである。四二ヘクタールにも及ぶ貯木・整理水面は昭和五十二年をピークとして原木取扱量が年々減少し、ここ五年間は取扱量ゼロという状態である。もともと、横浜港での木材取扱いは原地で製材加工されたものがコンテナで輸入されており、原木を取扱う貯木・整理水面は今後、必要なくなるものと予想している。そこで、この遊休化している金沢木材港の貯木・整理水面を活用し、マリナーを中心とした大規模な海洋性レクリエーション拠点の整備を計画した。(図-2参照)

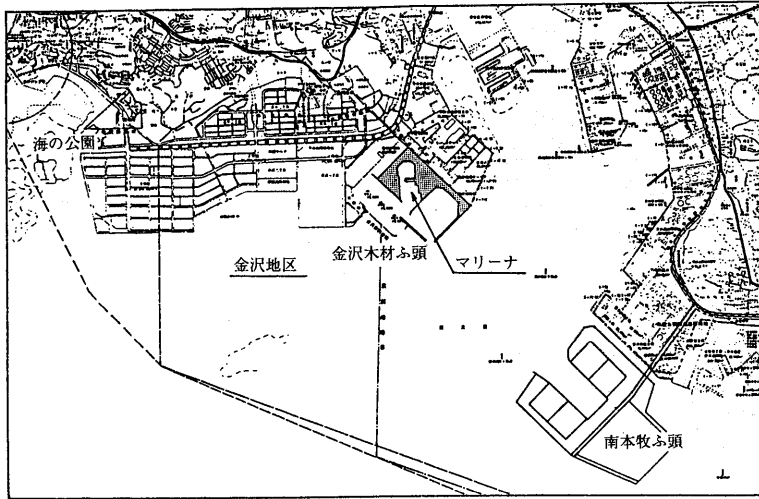
① 導入施設

基本コンセプトは、「新しい海の活動・文化を展開する新しいマリナー」とし、次の⑦④⑥を基本的な導入施設とした。

⑦ 総合的な利用のできるヨットハーバー

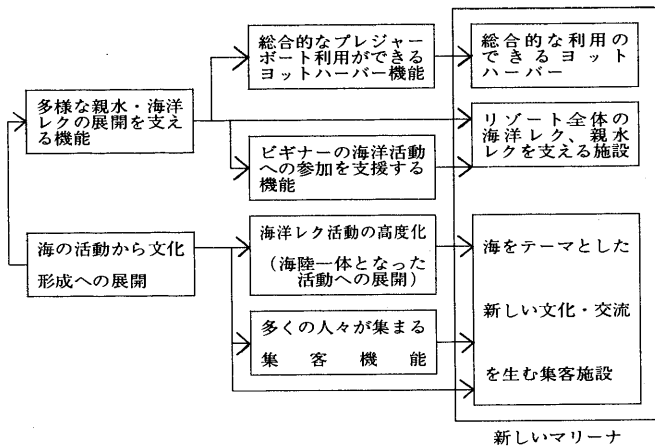
クルーザー、モーターボートのオーナーが金沢地区前面海域を中心とした海域で、クルージングや釣などの海洋レクリエーションを行う拠点とし、また、子供、家族づれなど一般の市民がプレジャーボートに乗る機会を提供するヨット

図-2 マリーナ計画位置図



トハーバーである。
 さらに、東京湾内外の長距離クルージングの
 拠点港、中継港、あるいは海上バス、水上遊覧
 などの拠点港とする。

図-3 施設複合化による新しいマリーナの創出



①海洋・親水レクリエーションを支える施設
 海洋レクビギナーのための指導・体験あるいは
 トレーニングの施設(マリンスクール)や、
 海洋レク活動のマナーの普及や文化醸成のため
 の研修施設が中核となる。また、プレジャーボ
 ートなどの海洋レクのための用具の貸出、販売
 施設や週末をこの地に滞在して過ごすための宿
 泊施設も入る。

図-4 新しいマリーナの施設コンプレックスイメージ

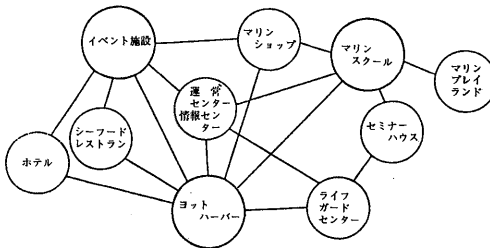
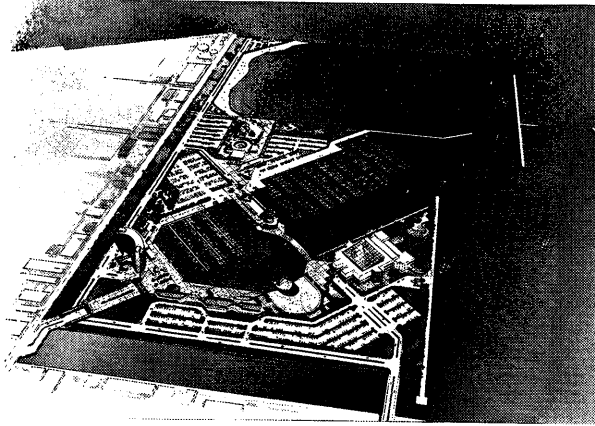


図-4 新しいマリーナの施設コンプレックスイメージ

②海をテーマとした新しい文化・交流を生む
 集客施設
 多くの人がその場所に滞留し、交流ができ
 る集客力のある施設であり、水際線のアメニテ
 イの高い高質空間を必要とする施設である。ホ
 ール、観劇施設、スタジオ、シヨールームなど
 市民のための多目的施設とし、文化性の高いイ
 ベント施設を導入する。(図-3、4)

写真-1 マリーナ完成予想図

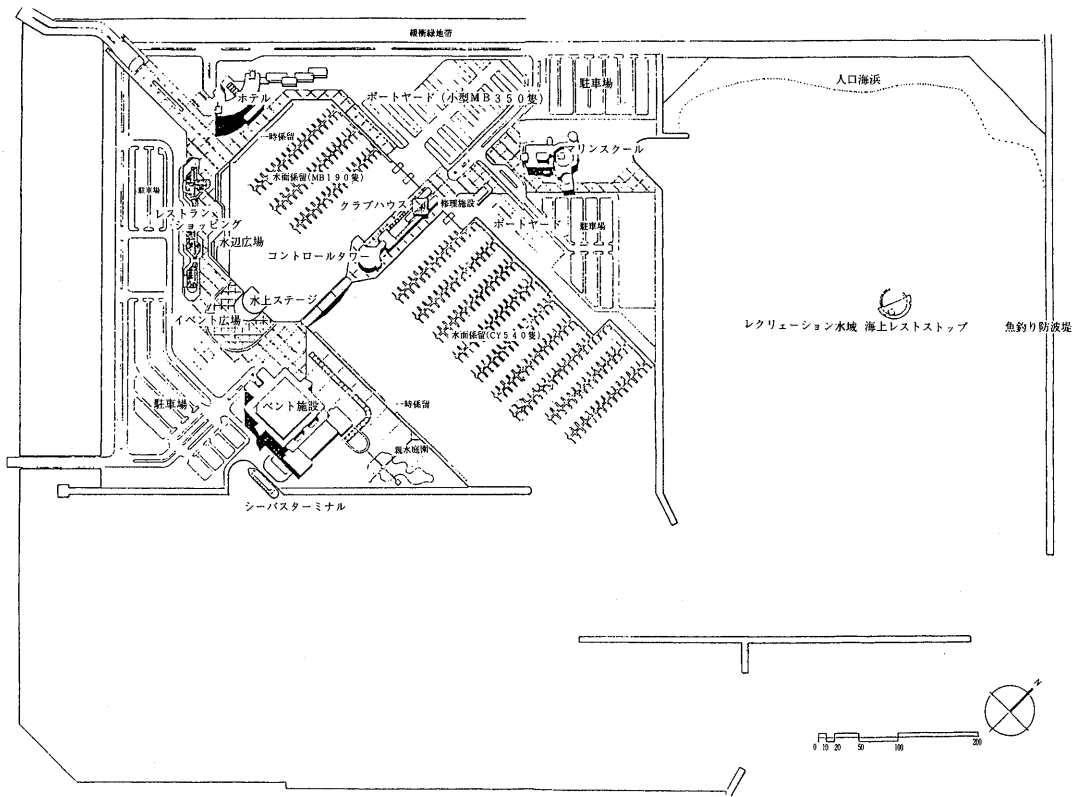


② 土地利用計画

土地利用の基本的な考え方としてアメニティ、利便性、機能性に配慮し、ヨットハーバー機能用地、緑地オープンスペース、親水空間の十分な確保により、空間の高質化を目指す。また、水際線を極力開放して、一般市民がいつでも散策や眺望ができるよう配慮するとともに、車、徒歩あるいは海からと多様なアクセスの確保に対応できるように配慮する。

これらの考えを基に一つの構想図を示す。
(写真-1、図-5)

図-5 金沢マリーナ構想図



四——管理・運営方策等の課題

① 親水・海洋レクリエーションの安全管理

東京湾、とりわけ横浜港の沖合という高密利用海域での海洋レクリエーション活動の導入においては、船舶航行を中心とした既存の海面利用との競合を回避する方策が必要である。このため、海洋レクの展開を可能にするためには、海面の利用調整や海洋レクの安全確保が条件となる。

② 海面の利用調整

金沢沖合3km以上では一万トン以上の大型船の航行が頻繁であり、沖合一〜二kmの海域では漁船及び小型船の航行、また停泊船が多く見られることから、原則として沖合一・5kmまでの海域をホームグラウンドとした海洋レク活動を指導することになる。

また漁業活動との競合については、利用時間帯、曜日、季節等の調整を図る必要がある、特に福浦前面、海の公園付近には、のりひび（九月〜三月）があり、この水域を避けた活動が要求される。

③ 海洋レクの安全確保

プレジャーボートの海難事故の六割は機関故障や転覆、衝突であるが、その原因は、気象・海象状況の不注意、基礎的な操船ミス、機関取扱のミスなど基本的な事項に係わるものが大部分である。

そこで、海事教育の徹底、技能の習熟や適切な情報の提供、整備の徹底等が重要な課題となる。

④ 事業運営の課題

金沢木材港の再開発は、ハイアメニティ空間形成の誘導や放置艇収容による水環境の整備、市民のレクリエーションニーズに応える場の提供など、アメニティインフラストラクチャーの整備といった性格を持たせている。

このため、公共の投資により快適空間の基盤整備を行い、民間企業の参加を誘導し、公民共同による事業運営の可能性を検討しなければならぬ。

事業の基本的条件としては、基盤整備（土地造成、護岸整備、外郭施設整備）は市が行い、土地も市が保有することによって可能となる「公共性の確保」、敷地内の道路、緑地、駐車

場の整備は施設の事業運営主体で負担するなど「財政負担の軽減」、あるいは、施設の建設事業運営は民間活力の導入を可能な限り行うなど「サービス、運営ノウハウの確立」などを中心に検討を進めることが今後の課題である。

五——おわりに

横浜は東京湾の水際線の中で最も変化に富み、首都圏に直結する位置にあって、豊かな水辺空間を形成しうる恵まれた環境にある。

金沢木材港マリーナは、その中において、港湾のアメニティ施設として重要な役割を演ずることが期待され、また、都市の身近な生活の中に溶け込んだ新しい形のマリーナを創出する可能性をも秘めている。そして根底にある海洋性レクリエーションの健全な発展を図っていくためには、市民ひとりひとりが共有の財産である海を美しく保ち、きれいな海をつくらうと努力することが最も重要なことではないのだろうか。

〈港湾局企画課課長補佐計画第一係長〉